

明治三十三年、私は京都帝國大學から歐米へ留學を命ぜられて出發の途、門司に於て、當時九州鐵道會社長であつた仙石博士に初めて面會した。

明治三十九年に政府は鐵道國有法により各地方鐵道を買收する事になり、九鐵も建設工事を急ぐ事になり、技師を物色中の處へ歐米から歸朝してゐた私も其選に當つた。これが

私の初で仙石博士の部下として働いた時である。後仙石博士は國有鐵道に入り鐵道院副總裁となり、其下に私は二年餘り居た、仙石博士が鐵道大臣を辭職せられた時に私も辭めたが、世人は『雷オヤヂ』など、如何にも無圖ケシい怖い人の様に思つてゐるが、私は永い間に曾てそんな印象をうけた事がない、寧ろ人情味の厚い事を知るのみである(文責在記者)

元氣に満ちた仙石氏

曾山 親民

市外洗足の自邸に、今を真盛りの菊の香に包まれながら曾山氏は若き日の仙石氏を追憶しながら語る。(十一月九日)

乗馬を好む

仙石氏は學生時代から元氣な人で、老境に入つても此點は群を抜いてゐたが、私は九州鐵道に勤務中、仙石氏を社長として迎へ、初めて氏を知つたのである。其頃の仙石氏の元氣瀟洒たる様は今尙ほ眼前に見る様な氣がする。

長崎線工事を私が擔任してゐる頃に、仙石社長は時々現場を観察に来る、大抵は乗馬で巡回したものである。私も乗馬が好であつたから仙石社長が來られると、何處からか馬を見付けて来て案内したものだ。

機關車の試運轉

長崎線が全通後、テンダーの機關車を新に購入して試運轉をやる事になり、關係者が皆出て見てみると、仙石社長は其機關車に乗つて手を振り乍らやつて來た、鳥打帽を被り火夫と共に真黒くなつて何かやつてゐる。皆あつて取られて見てみると、「オイ水を入れろ」と云ふ號令に、手桶で機關車に水を運ぶ騒ぎだつた。驛長が氣を利かして椅子を持つて來て、社長の處へ出すと、機關車上の仙石社長は物をも云はず、足をあけて椅子を蹴飛した。之も仕事に熱心な餘りやつた事であら

うが、兎に角皆驚いて了つた。

一週間位は徹夜の社長

明治三十七年、私は門司保線事務所長をしてゐたが、日支間の風雲急となつて小倉に於ても出兵の噂があつたので、足達に設けられて居た臨時驛に夫々準備をしてゐたが、愈々動員令が下り出兵となつた時に、私達は足達驛に小屋掛をして、仙石社長と寢食を併にして運輸事務に當り、一週間程の間は殆んど徹夜を續けた事もあつた。如何なる場合にも職務に對しては、實に驚くばかり熱心であつた。

仕事以外に趣味なし

九州時代の仙石氏は獨身で通し、生活は實に無趣味な様であつた。社宅の床の間なども碁盤と古新聞が積んである位のものだつた。それが後年現在の夫人を迎へられてからはすつかり性質が一變した様であつた。

長崎線當時は石黒誠次と云ふ工務課長を連れてよく來たものである。食事の時には私は長崎市のイチヨウ亭と云ふ鳥料理へ度々案内したが、仙石社長は『此肉屋は東京のと異つて電燈が點いてる』と云つて不思議がつてゐたが、其當時は勿論東京の牛肉屋にも電燈はあつたが、仙石氏は學生時代の記憶しかなかつたらしい、専門の技術以外は大變無頓着で、『淨瑠璃とは何か』なんて云ふ風であつた。

運動を好む